

令和5年度 横浜市立四季の森小学校 学校だより

このまちに生き、共に輝く子



四季の森 2月号

<http://www.edu.city.yokohama.lg.jp/school/es/shikinomori/>

次に備えて ～春の訪れを感じて～

学校長 森脇 信行



校庭西側の復活したせせらぎ

「鬼は外、福は内！」元気な豆まきの声をする2月の節分。節分とは、季節の分かれ目を指し、もともとは、立春、立夏、立秋、立冬の前の日を言いました。今では豆まきの風習が残っている2月の立春の前日だけをいうようになりました。立春とは春が立つと書きますが、はじめて春の気配が現れるという意味です。旧暦では、このころが1年の始まりでもありました。まだまだ寒い日が続く時期ですが、学校の裏庭では、ふきのとうが地面から顔をだし、

木々の芽は膨らんでいます。長い冬の後にはやってくる春の穏やかな季節は大きな喜びです。確実に春は近づいてきています。

さて、学校生活の1年間を締めくくるこの時期ですが、2月の声を聞くと次の学年へ向けての準備が大切になります。次に備えるためには今を知ることです。この1年間で、子どもは随分大きくなりました。外見はすぐわかりますが、見えにくい心の成長はどうでしょうか。それは、子どものさまざまな行動に現れています。友人関係はどう変化したでしょうか、読書傾向は、言葉遣いは、趣味やこだわりは、親への態度等々、子どもの何気ない様子をそのように見ることも次の備えといえます。「うちの子は幼いから・・・」「ちゃんとわかっているから・・・」などと思っていると、思わぬ変化に突然驚かされることがあるでしょう。よく、少年期の子どもには「手を離しても、目は離すな」といわれます。子どもと本気で向き合い、うるさがられても子どもの行動から目を離さないことが大切です。「携帯で連絡取りあっているから大丈夫」というものでは決してありません。また、「子どもを理解しようとする」ことはとても大切ですが、子どもに「親を理解させる」ことも同じように大切です。それが「しつけ」につながり、「駄目なことは駄目」という言葉が生きてくるのだと思います。

自然を観察していると、植物たちは、種ができると子ども（種）を新天地へ放り出します。どのような環境に出会っても、強く生きて行ってほしいという願いが込められているように見えます。また、新天地へ放り出された子（種）も、その期待を担って親元を離れたように感じられます。このことが、人の親の心構えとしての「子の成長への確信」「しつけの意味」に通じるものがあるように思えてなりません。